

東京・クザーヌス国際会議の報告

早稲田大学 八巻和彦

早稲田大学の研究グループは、早稲田大学および国際交流基金の助成を受けつつ、日本クザーヌス学会と共催で、昨2000年10月6、7、8日の三日間にわたり、内外から約五十名の参加者を得て、国際会議「東京・クザーヌス国際会議」を早稲田大学国際会議場で開催した。私が代表者を務めたので、簡単に報告したい。

ニコラウス・クザーヌスは1401年にドイツのモーゼル河畔の町クースに生まれた。そのために、本2001年はその生誕600周年にあたる。それにちなんで今年は、母国ドイツをはじめ、彼の活動の主たる舞台となったイタリア、それにオランダ、フランス、ポルトガル、スペイン、さらに米国でも記念の学会が開催される。

われわれは数年前から日本での会議を計画していたが、2001年になるとクザーヌスに関する国際会議が目白押しになることが予想されたので（これほどまで盛況になるとは予想しなかったが）、それに先だって前年に東京で開催することにしたわけである——「光は東方から」という標語のもとで。

この会議の共通テーマは、「境界に立つクザーヌス」（欧文で“Cusanus Standing at the Threshold”, “Der an der Schwelle stehende Cusanus”）であった。この意味するところは、クザーヌスの多面的な思想を、次のような三重の意味での「境界」に立たせて、吟味してみようということであった。その第一は、彼の思想が中世と近代との境界に立つと言われることの意味を再検討することであった。第二は、彼の著作『信仰の平和』に典型的に見られるような超ヨーロッパの要素に注目しつつ、彼の思想を東西文明の境界に立たせてみようということであった。第三には、20世紀と21世紀の境界としての現代における彼の思想の意義を検討することであった。

この目的に沿って、三日間の会議日程を区分した。第一日には「クザーヌスにおけ

る「伝統と革新」という表題のもとに第一の点を、第二日には「クザーヌスと諸宗教」という表題のもとに第二の点を、第三日には「クザーヌスの思惟の現代的意義」という表題のもとに第三の点を、それぞれ発表と参加者からの質疑応答によって討論していった。

少し具体的に日程を紹介すると以下のようであった。初日の午前は、小山宙丸氏（日本クザーヌス学会会長・白鷗大学学長・早稲田大学名誉教授）による開会の辞で始められ、午前の日程は、クラウス・クレマー（クザーヌス研究所教授）「クザーヌスの思惟による人間理性の偉大さと限界」と、H. ローレンス・ボンド（アパラチア州立大学教授）「可能の変貌する相——クザーヌス『観想の頂点』(1464)に対するもう一つの見方」という二つの招待講演で終わった。昼食ののちに、米国の教壇に立つ日本人であり、かつ米国クザーヌス学会会長でもある渡邊守道氏（ロングアイランド大学教授）の「協和と不協和——法的にして政治的思想家・ニコラウス・クザーヌス」という招待講演と、オランダの若手クザーヌス研究者イニゴ・ボッケン氏（ニームゲン・カトリック大学講師）の「クザーヌスとルネサンス哲学」という招待講演に続き、佐藤直子氏（上智大学講師）「クザーヌス『精神』におけるアリストテレス主義と新プラトン主義」と、ジャン M. ニコル氏（ルーアン大学教授）「クザーヌスにおける数学の革新とプロクロスの伝統」、長倉久子氏（南山大学教授）「ボナヴェントゥラとニコラウス・クザーヌス」、さらに高島慶子氏（ミュンヘン大学）「クザーヌスとシャルトル学派の影響」と研究発表が続いた。

この日の夜には、早稲田大学・染谷記念国際会館においてレセプションを開いたが、その際に、柴田南雄作曲の合唱曲「宇宙について」の、クザーヌスの思想を題材にとった第四章「神の探求について」を歌う日本の合唱団ハインリッヒ・シュッツ・コアアのテープを会場に流した。作品の美しさはもとより、この作曲者である柴田氏の視野の広さも参加者に深い感銘を与えた。

第二日の午前は、引き続き第一のテーマである「クザーヌスにおける伝統と革新」に充てられたが、とくに内外の三人の歴史家による発表がなされたことが特徴的であった。マンフレッド・グローテン氏（ボン大学教授）は「ニコラウス・クザーヌス、学生から枢機卿へ」という招待講演で、クザーヌスのケルン時代からの活動を報告し、ルドルフ・エンドレス氏（バイロイト大学教授）は「テゲルンゼー修道院における

ニコラウス・クザーヌス」と題する招待講演で、クザーヌスの修道院に対する関係をバイエルン全体の修道院改革運動の中に位置付けて明らかにした。さらに、小倉欣一氏（早稲田大学教授）は、「枢機卿ニコラウス・クザーヌスと帝国・選帝都市フランクフルト——教皇特派ドイツ旅行における教区分割とユダヤ教徒識別をめぐる」において、クザーヌスが当時ドイツ諸都市に増えつつあったユダヤ教徒をキリスト教徒から区別しておくために、彼らに識別票を付けさせるべし、という命令を発したことを、資料をもって明らかにしたが、これは現代におけるユダヤ人差別問題とも関わる微妙な点を扱うことになるために、日本ならではの研究発表であったと言える。

さらに、午前の後半には、山下一道氏（滋賀大学助教授）「ニコラウス・クザーヌスにおける反対対立の一致としての一者の思惟」と、矢内義顕氏（早稲田大学助教授）「クザーヌスとベネディクトゥス」という発表が行われた。

この日の午後は、第二のテーマである「クザーヌスと諸宗教」に充てられた。ヴァルター A. オイラー氏（クザーヌス研究所教授）の「『慣習は神の属性ではない』——アベラルドゥス、ルルス、クザーヌスにおける宗教間対話の意図」に続き、河波昌氏（東洋大学名誉教授）が「東西における万有在神論——クザーヌスと大乘仏教」という発表を、工藤 亨氏（元京都大学）が「『最大者』への二つの他性と東西世界宗教綜合の試み——全人類の共同体建設に向けて」という発表を行った。

この日の夕方は、一方において日本クザーヌス学会の年次総会を開催しつつ、他方、外国からの参加者用に「はとバス」による夜の東京観光を実施し、天ぷらを味わってもらったり歌舞伎を楽しんでもらった。

最終日は、ホアン M. アンドレ氏（コインブラ大学教授）による「ニコラウス・クザーヌスの思想の現代性——無知の知とその解釈学的・倫理的・美学的意義」と題する、多彩な視点からクザーヌスの思想を扱った招待講演から始められた。続いて午前中には、小田川方子氏（麗澤大学教授）の「ニコラウス・クザーヌスとバラツェルスの自然観」という研究発表、そして、ジェラルド・クリスティアンソン（ゲティスバーグ・ルター神学校教授）「クザーヌス、一致と葛藤」という招待講演がなされた。午後は、クラウス・リーゼンフーバー氏（上智大学教授）の「神認識における否定と直観」と題する招待講演から始まり、坂本 堯氏（聖マリアンナ医大名誉教授）「クザーヌスの人間福祉論」、加藤守通氏（東北大学教授）「クザーヌスと多元文

化論」, 松山康國氏 (英知大学教授) 「‘Spiritus Spirans’ としての『非他なるもの』——東洋的思惟との関連において」, 藪田 坦 (龍谷大学教授) 「ニコラウス・クザーヌスにおける無限性の問題」と続き, 八巻和彦 (早稲田大学教授) が「クザーヌスにおける〈楕円の思考〉——同行者としての他者を求めて」という最後の発表をした。引き続き, 同じく八巻が, 会議の代表者として閉会の辞を述べて, 公式日程は全て終わった。

その後, 隣接のリーガロイヤルホテル早稲田に場所を移して, 晩餐会を開催したが, 予定以上の参加者を得て, 料理の追加に事務局があわてねばならないという, 嬉しい一こまもあった。

会議終了の翌日には, 一泊二日で外国からの参加者を中心にして京都へのエクスカージョンを実施した。その際には, 京都在住の酒井修氏と藪田坦氏のご案内を頂き, 参加者一同に大いに喜ばれた。また, エクスカージョンの枠を超えて京都に滞在することになったオイラー氏に対しては, 中山善樹氏 (同志社大学) が特別に案内の学生を付けてくださり, 大変にありがたかった。このお三方に厚く御礼を申し上げる。

既に紹介した諸々の講演と発表のタイトルが示しているように, この会議での議論は, 主としてクザーヌス思想の特徴である「Docta ignorantia」, 「Coincidentia oppositorum」それに「Visio Dei」をめぐって展開された。とりわけクレーマー教授とリーゼンフーパー教授の講演はいずれも「Visio Dei」を対象とするものであり, 両者によるこの問題の扱いに存在する微妙な違いは興味深いものであった。また, 別の枠で早稲田大学に滞在することになった二人のドイツ人歴史家によって発表されたクザーヌス研究は, 欧米からの研究者たちの関心をも引くところ大であった。かの地でも, 哲学者と歴史家が一同に会することはなかなかないので, 東京で歴史家エンドレス教授の講演を聴いたクレーマー教授は, エンドレス氏を急遽今年のクザーヌス週間の中の講演に招きたいと申し出たほどであった。

今回の国際会議が全体として何をもたらしたかは, 筆者にも未だ十分には明らかになっていない。しかし, いくつかの点は明言できるであろう。第一に, 総勢十一人の欧米の招待講演者の誰もが, 遙か極東での学会であっても, 一切手抜きをした様子がなく, 極めて中身の濃い発表をしてくれたこと。また, 日本人の研究発表も水準の高

いものが多く、欧米の研究者に敬意をもって迎えられたこと。第三に、クザーヌス思想の魅力が多面的に提示されることで、さらなるクザーヌス研究に向けて参加者の意欲が刺激されたであろうことである。

これらの講演と発表を収める本国際会議の記録は、欧文にてイギリスの出版社から今秋には公刊される。これが刊行されれば広く世界にこの成果が伝えられることになり、その内の幾つかは、将来にわたりこの分野でのスタンダードな研究として繰り返し引用されることになるであろう。また、この会議での招待講演を集めた邦語の論文集を刊行することも計画中である。

今回の会議では、全ての講演および一般研究発表が、日本語、英語、ドイツ語、フランス語で行われるか、あるいは、発表の欧米語訳を配布して日本語で行われるかであった。これらの翻訳を用意した発表者および主催者にとっての労は少なくなかったが、相互の理解を深め、学会を有意義なものとするためには、必要なことであったと考えている。ご協力頂いた方々に深く感謝する。

また、この会議には、研究発表者以外にも中世哲学会の会員が、加藤信朗前委員長をはじめ、たくさん参加して下さった。そればかりか、岩田靖夫氏をはじめとする何人かの会員は、質疑の際に随時、自発的に通訳の労もとって下さったのであるが、これも感謝に堪えない。

最後に、今年に欧米で開催中のクザーヌス生誕 600 周年を記念する諸行事は、ウェブ上でも、<http://www.nikolaus-von-kues.de/>で見られることを付記しておきたい。